

# 御書の系年研究（その1）

## ——弘安年間の諸事象について——

若 江 賢 三

はじめに

- 1 疫病の大流行について
- 2 「けかち」と「小の三災」
- 3 大雪について
- 4 「やせやまい」について

むすび

はじめに

日蓮文書は現存するその量の多さに比して、かつてはその写本や真蹟を直にみることのできる者はごく限られており、宗派的な枠にとらわれない自由な発想からの研究はまだまだその歴史は浅い。真偽や系年の問題についても、未だにその学問的な検討が充分にはなされておらず、残された問題は多い。

本稿では、書かれた内容に主眼をおいて、系年の問題を再検討する。比較的手がかりの多い弘安年間の疫病の大流行と飢饉と大雪、及び日蓮自身の病等の諸事象に関わる遺文を相互に関連づける作業を通して諸御書の系年を再検討したいと考える。本文中の日奥は貞享3（1686）年の『御書新目録』、日通は明和7（1770）年の『境妙庵御書目録』、日諦は安永8（1779）年の『祖書目次』、日明は文化11（1814）年の『新撰祖書目次』、遺文録は明治13（1880）年の『高祖遺文録』、縮遺は『縮刷遺文』、定本は平成3年版の『昭和定本日蓮聖人遺文』、対



照録は『日蓮大聖人御真蹟対照録』を指す。諸目録における系年については、『昭和新修日蓮聖人遺文全集』の目次を参照。本稿で「異説なし」とするのは、これらの諸目録の間の系年に異説がないことを示す。また、同名の御書も多くあるので、＜＞内に定本の番号を示す。

## 1 疫病の大流行について

まず、建治末より弘安年間の疫病の大流行に関連する遺文について、その系年を検討する。建治4年2月29日に改元されて弘安元年となるのであるが、日蓮が改元の理由を記した真蹟＜278＞弘安改元事が残っており、そこに

弘安元年（太歳戊寅）、建治四年二月二十九日改元。疫病故歟。

とあり<sup>1)</sup>、日蓮は疫病の流行の故であろうとその理由を記している。一方、通説では建治4年（2月13日）に系年される＜274＞松野殿御返事（異説なし）に

去年の春より今年の二月中旬まで疫病国に充満す。十家に五家、百家に五十家、皆やみ死シ、或は身はやまねども心は大苦に値へり。

とあり<sup>2)</sup>、この時点まで、疫病が一年余りに亘って猛威をふるっていたことが知られるのである。本抄には真蹟の断片があるが、系年の記された部分はなく、刊本録内にも本満寺本にも系年はない。通説に従ってこの時点を建治4年（=弘安元年）と理解するなら、「去年」とは建治3年となり、「今年」が改元前の建治4年となる。従って、疫病大流行の期間は＜建治3年（初頭）～建治4年2月＞の間ということになる。一方、建治3年中に記されたと確認できる唯一疫病の流行について触れられている建治3年9月11日付け＜262＞崇峻天皇御書（日奥のみ弘安5年とす）に、「彼等が柱とする竜象すでにたうれぬ」とあるので、同抄は建治3年の著述と確定できる。そこには四条金吾の主君江間氏が病にかかったことが記された後

此の世間の疫病はとののまうすがごとく、年帰りなば上へあがりぬとをほえ候ぞ。

とある<sup>3)</sup>。今流行しているこの疫病は来年になれば大流行するであろう、というのが四条金吾と日蓮の共通の予測であったことが知られる。従って、建治3

年9月をそのはしりとする崇俊天皇御書と、前年の春から流行していたとする前掲の松野抄との間には、いくばくかの違和感があるのである。

建治3年末頃に疫病が既にある程度の流行を見ていたことは、12月6日に朝廷が法勝寺に疫病鎮静の祈願を命じていることから確認される<sup>4)</sup>。そして、日蓮と金吾とが予測した通り大流行となったのが、翌建治四年の春からであった。とするならば、松野抄にいう「去年の春」とは建治（3年ではなく）4年の春でなければならないのではないか。もしそうだとすると、「今年二月」即ち松野抄が著された時点は弘安2年の2月ということになるのである。そうすると、建治4年という系年は改訂を余儀なくされることになり、疫病の猛威は弘安2年まで引き続き衰えてはいなかった、ということになるのである。（後掲の年表を参照）

そのことを証する遺文をいくつか見出すことができる。まず弘安元年4月1日付け（日興写本による）＜282＞上野殿御返事には、石河兵衛入道の娘が亡くなった事を記し

この世ノ中をみ候に、病なき人もこねん（今年）などをすぐべしともみえ候はぬ上へもとより病ものにて候が（下略）

とある<sup>5)</sup>。弘安元年4月の時点で、世間の人々は疫病の流行のために、健康な者でもいつ罹病して死ぬかわからない、という不安に怯えていたことが知られる。

また、4月11日付け＜283＞檀越某御書（日通のみ文永9年）には

雪山童子の跡ををひ不軽菩薩の身になり候はん、いたづらに疫病にやをかされ候はんずらむ、をいじにや候はんずらむあらあさましあさまし。

とある<sup>6)</sup>。後述するように、日蓮はこの時点で「やせやまい」を病んでいたのであるが、同時に世間でも伝染病（疫病）が流行していたことが見てとれる。そして、この檀越某御書の系年が弘安元年であることも確定されるであろう。

さらにその3カ月後の「七月八日」付けの＜300＞時光殿御返事（異説なし）には日興写本があり、そこには「弘安元年到来」と記されている。この中に

なかにも今年は疫病と申シ飢渴と申シ、とひくる人々もすくなし。



とあり<sup>7)</sup>、引き続き疫病の流行が確認される。さらに本文中に「今年弘安元年」とあり、弘安元年と確定される7月28日付けの<302>千日尼御前御返事には

日蓮強盛にせめまいらせ候ゆへに天此国を罰ス。ゆへに此疫病出現せり。

(中略) 此れもかまくらも此方の者は此病にて死ヌる人はすくなく候。

とあり<sup>8)</sup>、幸いなことに門下で死ぬ者は少なかったけれども、弘安元年7月末は疫病は既に全国に蔓延していたということが確認される。遺文録以下で建治3年9月9日に系年される<260>兵衛志殿御書<sup>9)</sup>には

代ノ末になり候へばかんばちえきれい大雨大風ふきかさなり候へば、広き心もせばくなり、道心ある人も邪見になるとこそ見へて候へ。

とあり<sup>10)</sup>、本抄を弘安元年に系年すべきことは明らかであろう。(後掲の年表を参照) 9月の時点でもまだ疫病の流行は終息してはいなかったことが窺える。なお、「代ノ末になり候へば」は重要な記述である。後述するように、日蓮はこの時点をも「小の三災」の時と捕らえ、「末代の法華経の聖人の出現」の時と見るからである。

さて、同年閏10月13日(日興写本による。10月に閏月のある年は弘安元年と確定できる)の<314>上野殿御返事には建治3年末から弘安元年にかけての疫病流行の推移を記して

去今年は大えき此の国にをこりて、人の死ヌ事大風に木のたうれ、大雪に草のおるるがごとし。一人ものこるべしともみへず候き。(中略) 八月、九月の大雨大風に日本一同に不熟、ゆきてのこれる万民冬をすごしがたし。(中略) 疫病もしばらくはやみてみえしかども、鬼神かへり入ルかのゆへに、北国も、東国も、西国も、南国も、一同にやみなげくよしきこへ候。

とある<sup>11)</sup>。ここには「去今年」のこととして、建治3年(9月頃)から建治4年=弘安元年に(かけて)流行した疫病が、その後一旦は終焉しかけたけれども、8・9月には大雨や大風があり、飢饉となって人々は冬が越せないという状態となり、さらに閏10月頃までには、疫病は再度全国規模で広がっていた、という事実が記されている。こうして疫病は少なくとも翌年2月までは終息していなかったのである。

なお、「去今年」という表現は、管見の限り日遺文書の中には他に3カ所しか出てこない。一つは<294>治病大小権実異目であり

先代未聞の三災七難起る。所謂去今年、去正嘉等の疫病等也。

とある<sup>12)</sup>。後述するように、本抄の系年は弘安元年(6月26日)である。日蓮が活動した鎌倉時代において、疫病の大流行した時期は2度あるのであるが、これによれば、1度目が正嘉元年であり<sup>13)</sup>、そして2度目が「去今年」とであると記されている。この場合も「去今年」の範囲は建治4年の春より弘安元年の6月現在までを指している。次に、もう一つの例は治病抄と同日に記された<295>中務左衛門尉殿御返事に「今の日本国去今年の疫病は」とあるものであり、そして最後の例は弘安2年1月8日付けの<437>越後公御房御返事である。そこには

去今年、饑渴・章癘・刀兵と申シ恰モ小ノ三災ノ代ノ如シ。

とある<sup>14)</sup>。瘡癘(疫病)の流行は前年の建治3年秋頃から、饑渴(けかち)は弘安元年の7月より、そして刀兵は文永9年の二月騒動及び同11年の文永の役より始まっている。「小の三災の代の如し」とあるのは、この三災が出そろったことを意味しており、「去今年」が指すのは<建治4年—弘安2年初頭>の期間を指していることが知られるであろう。つまり「去今年」というのが「去年のある時期から今年の今まで」という期間を表しており、「去年と今年」という表現とはニュアンスを異にする、ということに留意しておきたい。

次に、弘安元年6月25日付け(異説なし。但し、後に述べる理由により、系年は弘安2年に改めるべきである)とされる<293>日女御前御返事では

今日本国の者去年今年の疫病と、去ヌ正嘉の疫病とは人王始マテ九十余代に並ビなき疫病也。(中略) 日本国の一切衆生すでに三分二はやみぬ。又半分は死シぬ。今一分は身はやまざれども心はやみぬ。

とある<sup>15)</sup>。ここに「去年今年の疫病」とあるが、「去年」が建治3年を指し、「今年」が建治4年=弘安元年を指すというのがこれまでの通説的理解であった。しかし、建治3年9月頃から始まった今回の疫病流行は(弘安2年の前半までに治まっていたと察せられる)、建治3年の段階では、まだ大流行のピークでは



なかった。前掲の<274>松野殿御返事には「去年の春より」とあり、前述のように、「去年」は建治4年を指す。日蓮の認識においては、大流行の開始は建治4(1278)年の春であり、これが翌弘安2年まで続いていた。それに対して、この<293>日女抄にはこの疫病による被害が現在進行形としてではなく、総括的に記されていることに留意したい。総括というのはある時点から振り返ってこそ可能であり、いつ終息するか分からない(弘安元年6月)状況のもとでは不可能である。事実、弘安元年の閏10月には、一旦終息しかけていた疫病が全国的規模で再燃したのであり、日女抄の記述は、それよりも後のものと見なければならぬ。さらに弘安2年1月3日付けの<325>上野殿御返事には

この両三年は日本国の内、大疫起りて人半分げんじて候上とあり<sup>16)</sup>、弘安2年の時点では、この疫病によって、日本の人口が半減した、としている。疫病は少なくとも弘安2年の2月中旬までは猛威を振るったのであるが、その時点で日本の人口が半減していた、ということであろう。いずれにせよ、日女抄では、終息を見届けたその時点から振り返っているのであって、日本の人口の半分が死に、3分の2が病み、3分の1は身は病まねども心を病んだと総括したのである。従って、上記の「去年」は建治4(=弘安元)年、「今年」は弘安2年を指すと解さなければならぬであろう。

なお、この日女抄と酷似する記述が、実はそれ以前にあったのである。前述のように、かつて、正元年間にも大疫の流行があったのであるが、そのことを記す<49>安国論御勘由来に

正元元年(己未)大疫病。同二年(庚申)、亘四季大疫不已。万民既超大半、招死了。

とある<sup>17)</sup>のがそれである。これによれば、正元元年より2年にかけての大疫の際、「大半」を越える人々が病んで死戦をさまよった、と総括している。「大半」とは「3分の2」を意味する。こうして見ると、日女抄の「日本国の一切衆生すでに三分二はやみぬ。又半分は死ぬ。今一分は身はやまざれども心はやみぬ」という記述はこれとそっくりであり、日蓮は、かつて安国論御勘由来に記した内容を当然意識していた。従って、弘安元年を中心とした疫病が、かつての正

嘉(正元)の大疫に勝るとも劣らない規模の惨禍であったことを示している。このように見れば、日女抄の場合も、10月の再流行の時期を越え、最終的に沈静化を見届けた時点からの総括であったと理解される。よって、その系年は弘安2年に改めなければならないのである。(後掲の年表を参照)

なお、上記日女抄の半年後、弘安2年11月の<350>上野殿御返事には

去年去々年のやくびやうに死し人々のかずにも入らず。

とある<sup>18)</sup>。これは一見建治3年(去去年)から弘安元年(去年)にかけて「やくびやう」が流行したという記述のように見えるかもしれないが、そうではない。建治3年はまだ大流行という状況でなかったこと、及び弘安2年の春の時点でもまだ治まっていなかったことは、前述した通りである。では何故「去年去々年のやくびやう」なのか。それは、本抄(<350>上野抄)が日女抄よりも半年後、弘安2年11月に記されたものであり、弘安2年も年末の段階では、疫病の流行は終息して既に久しい時期であった。その故に、日蓮には疫病の流行が「去去年」及び「去年」のこととして認識されていた、ということである。すでに意識としては新年であったと言えようか。<sup>19)</sup>もしこれが6月の段階であれば、日女抄と同じく「去年今年」という表現になったであろう。

以上の考察により、<293>日女抄は系年を1年ずらすべきことが承認されるのではなかろうか。なお、弘安元年6月25日は、後述するように、日蓮の「やせやまい」がやっと小康を取り戻したばかりの時期であり、日女抄のような長文を認めることは不可能な状況にあったのである<sup>20)</sup>。

なお、前掲弘安2年1月3日付け<325>上野殿御返事には「この両三年は日本国の内、大疫起りて人半分減じて<sup>21)</sup>」とあったが、浅井要麟氏は建治2年から弘安元年にかけて疫病が流行したと述べる<sup>22)</sup>。前掲<293>日女御前御返事を弘安元年の作であると見たからである。しかし前述したように、建治2年初頭より建治3年の秋までは疫病流行の事実を確認することはできない。浅井氏の誤解の出発点は、前掲の松野抄の系年を建治4年としたことの中に存したのであり、実際の「この両三年」とは、建治3年末より弘安2年の春までを指したのである。



さて、松野抄及び日女抄の系年の修正によって、疫病流行の精確な時期が確認された。大流行の始まった建治4年は、2月29日に弘安と改元される。しかし、改元によって疫病が終息するはずもなかった。松野抄では「去年の春より今年の二月の中旬まで疫病国に充滿す」と述べており<sup>23)</sup>、弘安2年2月中旬の時点ではまだ疫病の猛威は過ぎ去ってはいなかった。けれども、以後の遺文中には疫病の流行が続いていることを示唆する言及は見られず、まもなく猛威は静まったと推定される。以上の考察から、松野殿御返事及び日女御前御返事の系年は、弘安2年に確定するであろう<sup>24)</sup>。

次に建治3年(8月21日)に系年されている(異説なし)〈253〉弥三郎殿御返事に

今年の世間を鏡とせよ。若干(そこばく)の人の死ヌるに、今まで生きて有りつるは此事にあはん為也けり。此こそ宇治川を渡せし所よ。是こそ勢多を渡せし所よ。名を揚か名をくだすか也。

とある<sup>25)</sup>。本満寺本及び刊行録外には年号は記されていない。本文中の、多くの人が亡くなったという「今年」とは、建治3年でよいのであろうか? 疫病流行のピークが建治3年であったとする通説に依れば、それは当然ということになるだろう。しかし、建治3年8月以前の他の文献には、疫病の流行の記録は見られない。これまでの検討に依るならば、疫病流行のピークは弘安元年であったことが明らかであり、建治3年9月の時点がまだそのはしりとも言うべき時期であった。故に、8月の時点で「若干の人が死」んだというのは、建治3年の記事としてはそぐわない。日蓮遺文において「若干」は「少なからず」の意で用いられるからである。従って、本抄執筆の時期は弘安元年か2年でなければならない。さらに本文には

今の日本国の諸僧等は提婆達多・瞿伽梨尊者にも過ぎたる大悪人也。又在家の人々は此等を貴み供養し給フ故に、此国眼前に無間地獄と変じて、諸人現身には大飢渴・大疫病先代にすぎ大苦を受る上、他国より責メらるべし。

とある<sup>26)</sup>。建治3年8月の段階では、日本及び身延の地に「大飢渴」があった

という事実は確認できない。本格的な「けかち」が始ったのは、後述のように弘安元年の7月の時点であった。よって、本抄の執筆は弘安元年の7月以降でなければならない。故に、本抄は建治3年ではなく、翌年の弘安元年の8月に著されたものとすれば、矛盾は見事に解消するのである。弘安元年8月は「けかち」「疫病」及び第2回目の蒙古襲来(「合戦」)の脅威があり、前述した「小の三災」が出そろっていたのである。だからこそ、これからが「名を揚げるか名をくだすかの重要な時である」と日蓮は述べるのである。なお、翌弘安2年の8月の時点では「大飢渴」及び「大疫病」の状況は既に去っていた。(後掲の年表を参照)

## 2 「けかち」と「小の三災」

次に、疫病と並行して弘安元年より「けかち」が起こり、年末には大雪が降るという天災が続くのであるが、そのことは前掲弘安2年1月3日付け〈325〉上野殿御返事の続きに

去年の七月より大なるけかちにて、さといちのむへんのものと山中の僧等は命存シがたし。(中略)其上、去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ。年返れども鳥の声ならではをとづる人なし。

と記されてある<sup>27)</sup>。「けかち(飢渴)」は不雨によって起こる場合もあるが、弘安元年のそれは、多雨によるものであった。弘安元年7月7日付け(異説なし)の〈299〉種種物御消息に

たうじ(当時)はあめはしの(篠)をたてて三月にをよび、かわわまさりて九十日、やまくづれ、みちふさがり、人もかよはず、かつて(糧)もたへて、いのちかうにて候つるに

とある<sup>28)</sup>ように、この年は前半にも雨が異常に多かった。その種種物御消息の翌日に認められたのが、前掲の〈300〉時光殿御返事で、そこには「なかにも今年は疫病と申し飢渴と申し、とひくる人人もすくなく」とあった。

次に、同年9月19日付け(異説なし)〈306〉上野殿御返事には

今年は正月より雨ふり、ことに七月より大雨ひまなし。



とあり<sup>29)</sup>、弘安元年は一年を通して天候不順であった。9月24日付け<308>大田殿女房御返事(異説なし)には

うえたる代に食をほどこせる人は国王とうまれて其の国ゆたかなり。

とある<sup>30)</sup>。飢饉のときだからこそその功德は大きいと、日蓮は供養に対する丁重なる礼を述べている。7月以来のこの「けかち」は、当然のことながら、これに続く大雪の冬を越すまで解消することはなかったと察せられる。建治4年(2月25日)に系年される<276>上野殿御返事(異説なし)には、供養に対する礼を述べて、土の餅を供養して阿育大王となった徳勝童子の故事を引き

かれはけかちならず、いまはうへたる国也。

とある<sup>31)</sup>。「いまはうえたる国也」ということは、本抄の執筆が「けかち」の時期であったことが知られるのである。しかるに建治4年の春は、疫病の大流行は始まっていたけれども、「けかち」であったという記録については他の遺文に皆無である。前掲<325>上野抄には「七月より大なるけかち」とあり、それ以前は「けかち」ではなかった。弘安元年閏10月13日付け<314>上野殿御返事には

今年の寒温、時にしたがひて、五穀は田畠にみち、(中略)成劫のはじめかとみへて候しほどに、八月、九月の大雨大風に日本一同に不熟。

とある<sup>32)</sup>。これは一見上記<306>上野抄と矛盾するかのようであるが、必ずしもそうではない。大雨の最中の記述ならば、正月以来雨が多かったことが印象が深いであろう。多雨であったことは確かであろうが、前年末に比べれば温暖で、年が明けた当初、人々はほっと一息つく思いであったのであろう。本抄の記述からは、弘安元年2月の時点で「うへたる国」という状況はなかったことが知られるのである。となれば、本抄(<276>上野殿御返事)の系年に問題があることになる。本抄には日興本があるが、年号の記述はない。録外にもなく、遺文録に「建治4年」とあるのみである。従って、その系年については内容から判断するしかない。これまでも見てきたように、伝統的系年が正しいという保証はないからである。しかして、2月の時点で「けかち」があった年として本抄が該当するのは、弘安2年が最もふさわしい<sup>32)</sup>。弘安元年の7月以来継

続して、翌年の2月も引き続き「けかち」であったのは、けだし当然と思われるからである。結論するならば、<276>上野殿御返事の系年は建治4年ではなく、これを弘安2年に改めなければならないのである。(後掲の年表を参照)

さて、弘安元年の日本には、疫病と飢饉に加えて、第2次の元寇の脅威があった。ちょうど文永の役と弘安の役との中間点でもあり、戦時であった。この状況は、滅劫に起こるといわれる小の三災が出そろったということの意味するものであった。弘安2年(8月17日)に系年される<339>曾谷殿御返事(日通のみ建治2年とする)に

滅劫の時は小の三災をこる。ゆわゆる飢饉・疫病・合戦なり。飢渴は大貪よりをこり、やくびやうは・ぐちよりをこり・合戦は瞋恚よりをこる。

とある<sup>34)</sup>通りである。本抄の系年は日朝本にも刊本録内にも記されていない。弘安2年という系年には重大な疑義がある。以下にその問題について述べる。本抄には輪陀王と白馬のいななきの説話が語られており、ある時、突然白鳥がいなくなった時のことを記して

天もくもり、地もふるひ、大風かんばちし、けかち、やくびやうに人の死する事、肉はつか、骨はかはらとみへしかば、他国よりもをそひ来れり。

とある<sup>35)</sup>。ここには、まさに輪陀王の故事に託して、弘安年間の日本の状況そのものが映し出されていることに気づくであろう。まさにその故に、その後に「今のよも又是にたがうべからず」とあるのである。さらに注意深く本抄を読むならば、弘安元年(2年ではなく)8月における日本の状況と見事に一致する、ということが見えてくるであろう。つまり、<339>曾谷殿御返事は、弘安元年の日本の状況を反映した記述であり、記されたのは弘安元年であったと見られるのである。(後掲の年表参照)以下に3点にわたってその理由を挙げる。

まず、第1点として、曾谷抄の末尾に

事々命ながらへば其時申すべし。

とあり<sup>36)</sup>、いつ自身の死が訪れるかわからない、という日蓮の覚悟が記されている<sup>37)</sup>。後述するように、弘安元年は日蓮は「やせやまい」を患っており、8月の時点ではある程度回復していたが、その前後には、「定業か」と思われるよ



うな危機もあったのである。故に、本抄を弘安元年に著述されたものと解する  
 なら、この語はよく理解できるであろう。本抄を健康をとり戻していた弘安2  
 年の文と見るならば、上記のような切実さ深刻さの背景を理解することはでき  
 ないと思われるのである。

第2点は、この年に行われた法要とそれに関連する供養についてである。本  
 抄中に

貴辺の去ル三月の御仏事に驚目其数有リしかば、今年一百よ人の人を山中に  
 やしなひて、十二時の法華経を読ましめ談義して候ぞ。

とあり<sup>38)</sup>、この年の3月に、曾谷家の法要が身延の地で行われ、そこに百人以  
 上が参集する盛大な仏事となったことが知られる<sup>39)</sup>。一方、建治3年11月の<  
 267>曾谷入道殿御返事(異説なし)には

御布施に小袖二重・驚目十貫・並ニ扇百本。

とある<sup>40)</sup>。供養された「百本の扇子」というその数の多さは特筆すべきであろ  
 う。しかもこれが送られたのが法要の4ヶ月前の11月とすれば、それは、単に  
 夏の涼を取るためのものではなく、法要のためのものであったという可能性が  
 高い。また、百本という数が前掲<339>曾谷抄にある「一百よ人」という数と  
 重なるということも、偶然とは考え難い。さらに、十貫文という供養の額の多  
 さも、法要との関連でみれば理解しやすい。建治3年末のこの供養が、翌年3  
 月の法要に備えてのものであった、と考えられるのである。供養の時点が建治  
 3年末であり、それが前掲曾谷抄に記されたその翌(弘安元)年3月の法要のた  
 めであったと見ることができよう。

次の第3点がより重要である。それは「小の三災」という日蓮の時代認識に  
 関わるものである。日蓮は、曾谷抄において

是れ即ち小の三災の序なり。

と述べる<sup>41)</sup>。「小の三災」とは、壊劫に起こる大の三災(火災・水災・風災)に対  
 して住劫の中の滅劫に起こる飢饉・疫病・合戦を指すのであるが、日蓮におい  
 てはこれが末法=末代と直に結びつく故に、極めて重要な概念であったのであ  
 る<sup>42)</sup>。

実は、弘安より前の段階で、すでに「小の三災」の兆候は見えていたのであ  
 る。早魃及び飢饉についていえば文永8年、11年に、合戦については文永9年  
 の二月騒動、同11年の文永の役、また疫病については20年前の正元年間の大疫  
 があった。故に、年代不明(建治~弘安年間)の<203>滅劫御書(智慧亡国書)の  
 段階より、既に滅劫の最中であるという意識が醸し出されていたと思われるが、  
 疫病と飢饉と再度の蒙古襲来の危機とが、一時に集中して現れたのが弘安元年  
 の7月以降のことであった。さらに弘安2年(1月8日)と見られる前掲<  
 437>越後公御房御返事には

去今年、饑渴・章癘・刀兵と申シ恰モ小ノ三災ノ代ノ如シ。

とある<sup>43)</sup>。前掲曾谷抄の「小の三災の序」とこれとを合わせると、「小の三災」  
 が弘安元年の後半からいよいよ本格的になってきたとする認識があったことにな  
 り、これを受けて再度「小の三災」と記したのが越後公御房御返事であった  
 のではなかろうか。

このように見てくると、<339>曾谷殿御返事、<437>越後公御房御返事は  
 一連のものであり、日蓮は、弘安元年の後半より弘安2年にかけての時期を滅  
 劫における「小の三災」のピークの時と捕らえていたことが知られる。そして

仏語むなしからずば、一閻浮提の内に定メて聖人出現して候らん。

とある<sup>44)</sup>ように、真の法華経の行者の出現を強調していることが知られる。こ  
 れを受けてその翌月の<345>滝泉寺申状(弘安2年10月)には、

外書云、知未萌、聖人也。内典云、智人知起、蛇自知蛇云々。以之思之、

本師豈非聖人哉。聖人在国、日本国之大喜、蒙古国之大優也。駟催諸竜、

敵舟沈海、仰付梵釈、召取蒙王。君既在賢人、豈不用聖人、徒憂他国之逼。

とあり<sup>45)</sup>、日蓮が(蒙古の侵略の問題をも含め)三災を退治し克服しゆくためのキ  
 ーパースンであり「聖人」であることを、対外的に表明しているのである。

### 3 大雪について

弘安元年11月29日付け<318>兵衛志殿御返事には

このうるう十月三十日ゆきすこしふりて候しが・やがてきへ候ぬ、この月



の十一日たつの時より十四日まで大雪下て候しに（中略）いまにきゆる事なし。ひるもよるもさむくつめたく候事、法にすぎて候。さけはこをりて石のごとし。あぶらは金ににたり。

とあり<sup>46)</sup>、さらに

八十・九十・一百になる者の物語候は、すべていにしへこれほどさむき事候はず。

とある<sup>47)</sup>。この古老たちの言にあるように、弘安元年の冬は百年に1度あるかないかというような、記録的な寒さであったのである。

次に、前掲上野殿御返事と同じく日興写本があり、かつ「十二月二十七日」の日付をもつ「窪尼御前御返事」が2通ある。そのうち、弘安4年（日通のみ弘安3年）に系年される<420>窪尼抄には

抑も今年の事ハ申しふりて候上、当時はとしのさむき事「生れて已来いまだおほへ候はず」、ゆきなんどのふりつもりて候事おびただし。心ざしある人もとぶらひがたし。

とある<sup>48)</sup>。日蓮はこの年は生まれてから一番の寒さ、と述べている。ここで想起されるのは、弘安元年のあの年末の寒波の折り、古老たちが「すべていにしへこれほどさむき事候はず」と述べていたことばである。弘安4年にはそれ以上の寒波が襲ったということなのであるだろうか？ もしそうであるならば、日蓮は必ずそのことを記すはずである。しかし、そうした表現は見られない。では、どういうことなのか？

これまでの考察をふまえるならば、恐らく、窪尼抄の系年を弘安元年に改めることによってのみ、両書間の矛盾は解消されるであろう。即ち、<420>窪尼抄は弘安元年のことを述べたものであり、そうすると「今年の事ハ申しふりて候」と記された背景も理解できるのである。即ち、弘安元年は春以来の疫病の大流行があり、さらに7月以来の飢饉があり、さらに8・9月には大雨と大風があり、まさに三災が集中した年であった。このことについて「申しふりて候」なのである。日蓮は多くの消息文等においてそれに言及しており、弟子や檀那たちにも多く語ったであろう。そして、その冬は記録的な寒さであり、11月から雪

が多量に積もってずっと溶けない状況が続いた。年末に土地の古老たちが、「いにしへこれほどさむき事候はず」と述べた感想は、「生れて已来いまだおほへ候はず」という日蓮の感想と一致するのである。日蓮は弘安元年にその寒さを経験しているのであるから、もし弘安4年がそれに匹敵するあるいはそれを越える寒さであったなら、必ずや弘安元年との比較が語られたはずである。そうした記録が見られないとすれば、「生れて已来いまだおほへ候ハ」ざる寒さとは、やはり弘安元年の時点のものであったに違いない。なお、前述のように、弘安4年は日蓮は年間通して「やせやまい」を患っており、「今年の事ハ申しふりて候」という状況にはなかった、と判断されるのである。よって、本抄<420>窪尼抄は弘安元年に系年すべきであろう。<sup>49)</sup>

#### 4 「やせやまい」について

最後に、日蓮自身の「やせやまい」をめぐる遺文系年を検討する。弘安元年6月26日付けの<295>中務三郎左衛門尉殿御返事（異説なし）に

日蓮下痢去年十二月三十日事起り今年六月三日四日日々に度を増し月々に倍増す。定業かと存ル処に貴辺の良薬を得てより以来、日々月々に減じて今百分の一となれり。

ある<sup>50)</sup>通り、日蓮は建治3年末より下痢に苦しむ。弘安元年6月初旬に第1回めの山を迎えるが、四条金吾の調合した薬によって危機を脱することができたのである。

ところで、弘安2年（6月20日）に系年（日境のみ弘安元年）される<336>松野殿女房御返事の冒頭には、供養に対する返事が遅れたことを詫びて

麦一箱・いえのいも一籠・うり一籠等傍の物、六月三日に給候しを、今まで御返事申し候はざりし事恐れ入リ候。

とある<sup>51)</sup>。供養を受け取ってより18日後に返事を認めたのであるが、本抄執筆が通説の通り弘安2年だったとすれば、遅れたこと理由は不明である。供養の礼が遅れたことを詫びた遺文はきわめて稀である。それには何らかの理由があったはずである。それを可能な限り探究してみたい。そこで、そのヒントに



なるのが「麦一箱」という供養の内容である。麦の供養が記されるのは遺文中では比較的稀である。さらに、本抄が収穫期とは異なる6月の時点あることにも留意したい。そこで他例を見てみると、例えば弘安元年7月の<300>時光殿御返事では「むぎのしろきこめ一駄」が供養されている。弘安元年7月といえ、ば、「けかち」が始まった時期である。この例を参照するならば、<336>松野抄もこの「けかち」の時期のものであったという可能性が見えてくる。弘安2年の6月には、既に社会は「けかち」を脱していたが、弘安元年の6月20日は、その時点で「けかち」の兆候が始まっていたと見るべきであろう。前述のように、この年は春から多雨であった。収穫時を迎えて穀物の収穫見込みが乏しいと分かったと、穀価は徐々に高騰して行ったと思われる。そこで松野夫人は、病気に苦しむ日蓮を思い、乏しい蓄えの中から、せめてもの足しにと「麦一箱」を供養したのではないか。そこで、松野抄の執筆がこの弘安元年であったと仮定してみよう。そうすると、前述したお礼の返事が遅延した理由が俄然明らかとなってくる。即ち、供養を受けた時点では、日蓮は病のために筆が執れなかったということである。前掲<295>中務抄にあるように、弘安元年であれば、6月3日は下痢が激しくなっており、確かに執筆は不可能な時である。四条金吾の助けにより、日蓮は幸いこの危機を脱することができた。そして20日になって、やっと筆を持つことができるようになったということではないか。このように解するならば、18日の遅延の理由を理解することができるのである。よって、<336>松野抄の執筆は弘安元年であったとする仮説は承認されるべきであろう。同抄の系年を弘安元年に改めるべきである<sup>52)</sup>。(後編の年表参照)

さて日蓮は、弘安元年は1月より5月までの間、長文の消息類はほとんど記していない。弘安元年2月28日付け富木氏に宛てた<277>始聞仏乗義(「悲母の第三年」とあるので系年が確定する)に

為病身之故、不委細、又又可申。

とある<sup>53)</sup>。このように、病のために消息文を記すことはままならなかった。そして前述の中務抄と同じ日付(6月26日)になっている<296>兵衛志殿御返事(日通のみ弘安2年とす)に

はらのけはさえもん殿の御薬になをりて候。

とあり<sup>54)</sup>、四条金吾の調合の薬によって、6月下旬にはやや持ち直したのである。そして、この同じ日にもう一通の書を認めた。それが前述の<294>治病大小権実違目(富木入道殿御返事)である。これを弘安5年の系年とする説(日奥、日明、遺文録、縮遺)があるが、同抄には

さへもん殿の便宜の御かたびら給ひ候了ヌ。

とあり<sup>55)</sup>、これは前掲の中務抄に

ときどののかたびらの申し候べし。

とある<sup>56)</sup>のと符合する。富木氏が四条金吾に託したかたびらを「いただくことに致しましょう」と礼を述べているのである。故に同抄の執筆は同じく弘安元年であったことが確認される。この治病抄に

御消息ニ云ク、凡ソ疫病彌興盛等云々。

とあり<sup>57)</sup>、弘安元年6月の時点で疫病が大流行していたという史実がここでも確認される。富木氏の問いに答えて日蓮は、自らの病を省みることなく、仏法の観点から病の原因探究とその対処について、二人(四条氏と太田氏)への手紙の中に、詳しく記しているのである。この時点では日蓮の病は完治してはいなかった。7月8日付け前掲の時光御返事の続きに

たとひやまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに、麦の御とぶらひ金にもすぎ、珠にもこえたり。

とある<sup>58)</sup>。前述のごとく弘安元年は、7月頃より「けかち」があり、その折りの麦の供養がいかに貴重であるかと、礼を述べている。「たとひやまひなくとも」という表現からは、自身がまだ病に苦しんでいるさまが窺えるであろう。しかしながら、日蓮は7月の末には長文の<302>千日尼御前御返事を認めており、病状はある程度快方へ向かっていたと思われる。また、同月に<301>妙法比丘尼御返事<sup>59)</sup>を著している。同抄は思いのこもった大長編である。日蓮はさらにまた、重書である<307>本尊問答抄もこの年の9月に著した。閏10月著述の<316>四条金吾殿御返事には「今度の命たすかり候は、偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替給ひて御たすけ候歟<sup>60)</sup>」とあるように、10月の時点で再び重大な事態に陥



った病を克服したが、その時も金吾の介抱によって危機を脱することができたのである。しかし、まだ全快というわけには行かなかった。弘安元年11月29日付け<318>兵衛志殿御返事に

去年の12月30日よりはらのけの候しが、春夏やむことなし。あきすぎて十月のころ大事になりて候しが、すこしく平癒つかまつりて候へども、ややもすればをこり候に（下略）

とある<sup>61)</sup>通りである。弘安元年の年内はいつぶり返すか分からない状況であったと察せられる。

このように、日蓮は約1年に亘っての闘病を経て、弘安2年を迎えることになる。国内では疫病が続いており、年末に大寒波が襲い、身延の地は年始にかけて大雪のため交通も麻痺に近い状況であったのである。

年が明けると、ある程度体力は回復したと察せられる。しかし、3年後の前掲弘安4年12月8日付け<418>上野殿母尼御前御返事に

今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々にをとろへ、夜々にまさり候つるが、この十余日はすでに食もほとをどとどまりて候上

とある<sup>62)</sup>ように、弘安4年に「やせやまい」は再発しており、以降も基本的に体調はすぐれなかった。

次に、堀日亨氏<sup>63)</sup>が弘安5年に系年した<430>筵三枚御書の系年について再検討しておく。同抄には

抑<sub>レ</sub>三月一日より四日にいたるまでの御あそびに、心なぐさみてやせやまいもなをり、虎とるばかりをほへ候上、此御わかめ給<sub>テ</sub>師子にのりぬべくをほへ候

とある<sup>64)</sup>。弘安5年の3月の1日より4日まで、日蓮は外に出かけ（御あそびをし）、心身ともにリフレッシュして、「やせやまい」もなおった、というのである。これに対し、姉崎正治氏は本抄系年を弘安元年と主張した<sup>65)</sup>。しかしながら、既に見てきたように、弘安元年3月の時点では、まだ「やせやまい」という表現は用いられておらず、3月の時点で一時的にせよ外出が可能なほど日蓮

の健康は回復してはいなかったのである。

その後、宮崎英修氏<sup>66)</sup>は、新出の<425>内記左近入道御返事と<417>老病御書<sup>67)</sup>により、<430>筵三枚御書の系年を弘安4年とした。それは、以下のような論を展開する。即ち弘安4年12月の<418>上野殿母御前御返に

去<sub>ル</sub>文永十一年六月十七日にこの山に入りて今年十二月八日にいたるまで、此の山出<sub>ル</sub>事一步も候はず。ただし八年が間やせやまいと申しとしどしに身ゆわく、心ほれ候つるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々にをとろへ

とあり<sup>68)</sup>、ここに日蓮は、文永11年に身延へ入山してより弘安4年の現時にいたるまでの8ヶ年、身延の地を一步も出ていない、とある。しかしながら、実は弘安4年の3月初めに内々に「駿河方面の信徒のもとに出かけられた」のだというのである。宮崎氏は前述の新史料によって、日蓮は弘安4年の春の時点で実際に身延の外に出ており、本抄が弘安5年でなければならない理由はなしとする。しかしながら、何故に両書がその証拠となるのか、説得力のある理由を示していないのである。

次に、岡元鍊城氏<sup>69)</sup>は宮崎説を批判的に継承し、筵三枚御書の弘安4年説を決定的なこととして述べている。即ち、<425>内記左近入道御返事（対照録では弘安5年に系年される）には

抑<sub>レ</sub>去年の来臨は曇華の如し。将又夢歟幻歟。疑<sub>ヒ</sub>いまだ晴<sub>レ</sub>ず候処に、今年之始深山の栖雪中の室え、経於多国御使、山路をふみわけられて候にこそ、去年の事はまことなりけるやまことなりけるやとおどろき覚へ候へ。他行之子細、越後公御房の御ふみに申候歟。

とあり<sup>70)</sup>、同氏は上記を次のように解釈・解説するのである。「さて、去年のこの身延の日蓮のところまでお出ましいただいたことは、優曇華がごく稀に花を咲かせるように御奇恃なことで大変嬉しく存じました。そのとき実際にお会いしていませんので御来訪が夢であったのか幻であったのかといぶかしく思われ、本当かどうか疑いの気持ちがはれていないところへ、今年の正月を迎えて深山雪中の草庵に多くの国を通過されて御使者を遣わしてくださいました。雪の山



路を踏み分けられて御使いがいらしたことは、さてこそ去年の御来山も事実であったことよ、本当のことよと、改めて驚きをばえた次第であります。去年の御訪問の時はよそへ出かけていて不在中だったのですが、その他行中のいきさつやお礼などは、越後公御房が指し出したお手紙で申しあげたことかと存じます」と<sup>71)</sup>。

上記の要点を繰り返すと、「去年（弘安4年）三月初旬、内記左近入道自身が身延を訪れたが、相憎く日蓮は駿河上野の南条氏宅へ訪問外泊中の留守のことであったために内記左近は日蓮に会えずに帰った」というのである。しかしながら、筆者には、それはどう見ても無理な読みと思われる。本文をどう読んでも「不在であって逢えなかった」などと書かれてはいない。また、これは「後から来訪を伝え聞きましたよ」という表現でもない。さらに、「他行之子細、越後公御房の御ふみに申候か」とある「他行の事」は日蓮が「他行」したという証拠にはならない<sup>72)</sup>。さらに、「将又夢か幻か」という表現は、現実には日蓮が内記左近に会ったことを示しており、その感慨を記したものに他ならない。夢にしても幻にしても視覚に訴えるイメージである。思いもかけなかった出会いに、そのことが事実であるとは信じられないという喜びを叙述する表現ではないか。この場合は、覚めてほしくない、という思いを記している<sup>73)</sup>。

以上の考察からも明らかな如く、この内記左近抄がたとえ何年の執筆であろうとも、その前年に日蓮が身延に不在の時期があったことの証拠とは、とてもなり得ないのである。また、上記の弘安4年12月の<418>上野殿母御前御返事によれば、弘安4年は春から12月まで、日蓮の病が良くなったといえる時期は見られず、さらに細かく見てゆくと、同年の前掲<292>阿仏房御返事には「自正月至今月六月一日、連連此病無息<sup>74)</sup>」とある。筵三枚御書の「三月一日より四月にいたるまでの御あそび」が身延の地を出たことを意味する（これについては異論はない）ならば、この弘安4年も同抄（筵三枚御書）系年の対象外となるのである。

岡元氏は堀説を批判して本抄系年を弘安4年とするのであるが、その前提（日蓮が弘安4年春に身延を出たという事実）の立証は不成立であり、「此の山出ル事一

歩も候はず」と記した日蓮自身の証言を覆すことは、もとよりできていない。よって、日蓮が身延を離れたのは<418>上野殿母御前御返事の著された翌、弘安5年の春でなければならないのである。以上の考察によって、筵三枚御書の系年は弘安5年であることが再確認される。本抄からは、弘安5年の3月、一時的に日蓮が体力を回復したという事実も確認されるであろう<sup>75)</sup>。三大秘法稟承事の執筆はその直後の弘安5年4月であった<sup>76)</sup>。

最後に、通説では建治3年に系年される（日諦、日明、遺文録、縮遺；日通のみ弘安3年）6月3日付けの<292>阿仏房御返事の系年を考察する。本文中に

既受生及六旬。老又無疑。只所残病死二句而已。然而、自正月至今月六月一日、連連此病無息、死事無疑歟。

とある<sup>77)</sup>。昭和定本は宮崎英修氏の説により、これを弘安元年に系年している。確かに建治3年12月30日から弘安元年にかけて日蓮が「やせやまい」で苦しんだことは、前掲の<295>中務三郎左衛門尉殿御返事に記されている。これと阿仏房御書の内容は、一見非常に近い。しかしながら、弘安元年であれば、阿仏房抄の執筆の6月3日の時点において、日蓮は筆をとることができない状況であった。これは前述した通りである。また、日蓮は、弘安元年の病は前年末から始まったと認識しており<sup>78)</sup>、「正月」からではない。1日の違いといえども、意識においては大いに異なる。また、弘安4年の場合は、「やせやまい」もかなり慢性的になっていて、何日からという明確な認識もなかったようである。さらに、阿仏房抄の系年を考えるにおいて決定的なのは「既に生を受けて六旬に及ぶ」とある記述である。日蓮が60歳となったのは弘安4年である。弘安4年5月の<405>八満宮造営事に、「齢既に六十にみちぬ」とあり、同10月の<993>富城入道殿御返事に「予既に六十に及び候へば」とあるように、60歳は区切りの年でもあり、弘安4年の実年齢が<292>阿仏房御返事にも記されたと見るのが妥当であろう。縮刷遺文において稲田海素氏は「此の文ノ六旬ヲ宗祖ノ御年ト見奉リテ弘安四年に移すべき歟」と述べている<sup>79)</sup>。しかし、本抄が「阿仏房御返事」と題されている故に、すでに弘安4年には死亡（弘安2年3月）している阿仏房に宛てたとするところが、系年改訂を躊躇させた所以であろう。



しかしながら、御書名は編纂者の思い違いの場合もあり、実際には夫人宛、ということもあることである。以上の考察から、本抄は弘安4年に系年しなければならない。従って、＜292＞阿仏房御返事は、千日尼（又は息子の藤九郎守綱）或いは別の人物に与えられたものと判断され、弘安4年の著述と確定できるであろう。

### むすび

本稿での考察により、系年を改訂または確認した御書は以下の14篇である。もともと異説のないものについてはカウントしていない。

＜274＞松野殿御返事→弘安2年

＜262＞崇峻天皇御書→建治3年

＜283＞檀越某御書→弘安元年

＜260＞兵衛生志殿御書→弘安元年

＜293＞日女御前御返事→弘安2年

＜253＞弥三郎殿御返事→弘安元年

＜276＞上野殿御返事→弘安2年

＜339＞曾谷殿御返事→弘安元年

＜420＞窪尼御前御返事→弘安元年

＜336＞松野殿女房御返事→弘安元年

＜294＞治病大小権実遺目（富木入道殿御返事）→弘安元年

＜430＞筵三枚御書→弘安5年

＜403＞三大秘法稟承事→弘安5年

＜292＞阿仏房御返事→弘安4年







注

- 1) 定p.1454
- 2) p.1389、定pp.1441-2.
- 3) p.1173、定p.1395
- 4) 『日蓮大聖人年譜』2000、第三文明社、p.200を参照。
- 5) p.1545、定p.1490
- 6) p.1294、定p.1493
- 7) P.1550、定p.1534
- 8) pp.1313-4、定pp.1544-7
- 9) 系年については後述。縮遺、定本も建治3年とする。日諦、日明は弘安元年とするが、日通は弘安2年とする。
- 10) p.1095、定p.1387
- 11) p.1552、定p.1596
- 12) p.997、定pp.1519-20
- 13) 正確に言えば、正嘉元年は大地震のあった年であり、その2年後の正元元年から2年にかけてが大疫が流行の時期である。安国論御勘由来P.33、定P.421を参照。
- 14) 定p.2874。同抄には年号がないが「正月八日」という日付からは弘安2年以外には考えられない。
- 15) p.1248、定p.1512
- 16) p.1554、定p.1621
- 17) P.33、定P.421。なお、弘安元年9月6日付の〈305〉妙法比丘尼御返事に「如是三災七難、数十年起りて民半分に減じ p.1409」とあるが、これは建治3年より弘安元年9月までの時点で既に民が半減していたといっているのではなく、正元以来「数十年」の間に人口が半減したと長期のスパンで述べた表現である。
- 18) p.1561、定p.1708
- 19) 例えば日蓮は49歳の11月28日に著した〈73〉金吾殿御返事に「すでに年五十に及ぬ」p.999と述べている。これと同様、年末近くの意識ではすでに新年になっているといえよう。
- 20) 弘安元年6月26日には、3通の書を認めており、合計すればかなりの紙数になる。日女抄系年が弘安元年とすれば、6月25日はその前日である。2日連続してこれだけの量を記すのは、病み上がりの身にはとても不可能なことであつたろう。
- 21) p.1554、定p.1621
- 22) 『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻p.351を参照。
- 23) P.1389、定pp.1441-2
- 24) 鈴木一成氏は、「去建長5年より今に至るまで二十余年」「日本国の去年今年の大疫病」という言葉、及び後の数書との内容的関連とを総合して考うればそこ（弘安元年）に落着せざるを得ない。花押もこれを裏書きしている。と述べるが、建長5年

より弘安2年まででも「二十余年」は当てはまり、「去年今年」については前述の通りである。なお、この日女抄は鈴木氏の花押研究にあつては重要な位置を占め、5期に分けた花押の変遷の内の第3期の始まりのメルクマールとなるのが本抄の花押である。しかるにこれが誤っているとすれば、同氏の花押研究の信用に関わることとなるであろう。同氏『日蓮聖人遺文の文献学的研究』p.478を参照。

- 25) p.1451、定pp.1569-70
- 26) p.1450、定p.1568
- 27) p.1554、定p.1621
- 28) p.1549、定p.1531
- 29) p.1551、定p.1521
- 30) p.1018、定p.1587
- 31) p.1544、定p.1451
- 32) p.1552、定p.1596
- 33) 建治2年3月の〈212〉忘持経事には「自下州至于甲州、其中間往復及千里、国々皆飢饉、山野充滿盜賊、宿々乏少糧米」とあり、建治2年の春の時点で局地的に「飢饉」といえる事態はあつたであろう。本抄は富木氏が母の遺骨を懷いて身延を訪れたさいの消息であるが、3月初旬であれば、まだ収穫前でもあり、道中の食料が豊富でなかった、というのが本抄の趣旨であり、建治2年の2・3月が身延において「うへたる国」といえるほどの深刻な事態に至ったわけではなかろう。2月下旬の時点で「うへたる国」であつたのは、やはり弘安2年であろう。
- 34) p.1064、定p.1663
- 35) p.1061、定p.1657
- 36) p.1065、定p.1664
- 37) 文永9年の〈101〉富木殿御返事には「万事靈山を期す」とある。佐渡流罪第2年目の年は、日蓮にとっては、やはり生命の危機の続く緊迫した時期であつたことが窺われる。
- 38) p.1065、定p.1664
- 39) 弘安元年11月の〈318〉兵衛志殿御返事に「人はなき時は四十人、ある時は六十人（P.1099、定P.1606）」とあり、身延の日蓮のもとに弘安元年の時点で40～60人の弟子が共同生活を営んでいて、弘安2年にはその数が100人に増えていた、とする解釈が（あり、その故に〈339〉曾谷抄は弘安2年でなければならないとする見方が）あるが、それは間違っている。曾谷抄のいうのは、法要のために一時的に人数が百人を越えた、ということを述べたものであろう。
- 40) p.1057、定p.1407
- 41) p.1064、定p.1663
- 42) 小の三災については後稿で詳述の予定。〈339〉曾谷抄の中に「故大進阿闍梨の事なげかしく候へども」とあり、本抄執筆の直前に大進阿闍梨が死亡したことが知



られる。この大進阿闍梨と弘安2年の時点で落馬事故を起こした大進房とは別人物である。大進阿闍梨の死去が弘安元年であったことは弘安元年9月15日付けの<340>四条金吾殿御返事に「大進阿闍梨死去の事」とあることによって証せられる。詳しくは後稿。

- 43) 定p.2874
- 44) P.1181、定P.1667
- 45) p.850、定p.1678
- 46) p.1098、定p.1605
- 47) p.1098、定p.1605
- 48) p.1486、定p.1900
- 49) なお、弘安4年(11月25日)に系年される<416>地引御書(異説なし)には、弘安元年11月のことを記した前掲<318>兵衛志殿御返事と酷似する内容を示す表現がある。即ち「十一月(中略)十一日より十四日までは大雨ふり、大雪下て、今に里にきへず。山は一丈二丈雪こほりて、かたき事かねのごとし。二十三日四日は又そらはれて、さむからず。(p.1375、定pp.1894-5)」とあるのがそれである。前述のように、弘安元年末の寒さは記録的なものであり、11月11日から14日まで大雪が降り、また雨が降って積もった雪がかたまって「金剛のごとし、いまにきゆることなし」という状況であった。二つの遺文はその点では内容が重なるが、地引御書では大雪の前後は暖かであったこと、十間四面にひさしを作って草庵を立派にしたこと、等は弘安元年の状況とは違い、弘安4年の著述とする通説を否定することは困難である。
- 50) p.1179、定p.1524
- 51) p.1394、定p.1651
- 52) 体調のせいで手紙が出せなかったという例としては弘安4年10月の<413>富城入道御返事に「雖賜度々貴札、為老病之上、又不食氣候間、未奉返報候条、其恐不少候。(P.993、定P.1886)」とある。このように弘安4年の段階では、供養に対する返事は常時困難になっていたと思われる。しかし、弘安元年の段階では、弟子檀那からの供養等に対しては、短かめの消息で可能な限り対応していたと思われる。
- 53) p.984、定p.1454、真蹟集成3巻p.23
- 54) p.1097、定p.1525
- 55) p.995、定p.1517
- 56) p.1179、定p.1524
- 57) p.995、定p.1517
- 58) p.1550、定p.1534
- 59) 現時を仏滅後「二千二百二十七年」としていることから系年が確定する。
- 60) p.1185、定p.1600
- 61) p.1099、定p.1605

- 62) p.1593、定pp.1896-7
- 63) 堀日亨編『日蓮大聖人御真筆写真集』1931を参照。
- 64) p.1587、定p.1913
- 65) 法華18-11を参照。
- 66) 宮崎英修「日蓮聖人晩年の健康をめぐって」大崎学報103、1955を参照。
- 67) 老病御書の全文は「追申 老病の上、不食気いまだ心よからざるゆへに、法門なんどもかきつけて申すして、さてはてん事なげき入て候。又三島の左衛門次郎がもとにて法門伝へ候けるが始中終かきつけて給へ候はん。其ならずいづくにても候へ、法門を見候へば心のなぐさみ候ぞ 定p.1896」である。しかし、この中に日蓮が三島等へ出かけたと記されているわけではない。
- 68) p.1583、定pp.1896
- 69) 岡元鍊城氏『日蓮聖人遺文研究第三巻』pp.399-527を参照。
- 70) 定p.1906
- 71) 山中喜八監修・岡元鍊城編著『真蹟対照現代語訳日蓮聖人の御手紙・第二巻弟子・壇越篇』pp.111-2を参照。
- 72) むしろ内記左近に対して「あなたの他行については、越後公御房の手紙に書いていただいたのでしょうか」と解するのが妥当ではないか。
- 73) 逆に、夢であれば早く覚めてほしい、という表現もある。<400>上野尼御前御返事の「ゆめかまぼろしか。さめなんさめなんともえども、さめずしてとしも又かへりぬ。P.1576、定P.1859」とあるのがそれである。これは、わが子五郎の死が現実であってほしくない、という母の心境を述べたものである。また<182>国府尼御前御書に「ゆめか、まぼろしか、尼ござんの御すがたをばみまいらせ候はねども、心をばこれにとをばへ候へ。P.1325、定P.1064」とある。これは日蓮が国府入道の顔を見た瞬間に、尼御前の姿を思い浮かべた、ということである。内記左近の場合は、日蓮が彼の顔を見て、それが夢か幻ではないのかと、また、別れた後も夢ではなかったのかと疑ってしまったという内面を記したものである。また、雪の新年に遠くから使いをして日蓮のもとにやってきた内記左近<本人>の姿を見て、前年の来訪のことも現実であったのだと、懐かしさがこみ上げてきた、という心境を綴ったものであるに違いない。なお、<312>四条金吾殿御返事には、金吾の所領が増されたという報告を受けた日蓮が、「まこととも覚へず候。夢かとあまりに不思議に覚へ候。御返事なんどもいかやうに申すべしとも覚へず候」とある。これは書面での報告であったから、「夢か」とはあっても「幻か」という表現はない。
- 74) p.1315、定p.1508
- 75) 筵三枚御書の対告衆を上野氏と限定する必要はなかろう。なお、岡元氏の堀氏等の他説を批判する態度については、謙虚さを欠いているように思われる。研究者にとっても命であるはずの御書本文が、自ら精確に読めていないことを深刻に反省すべきではないか。



76) 三大秘法抄は、以前は弘安 4 年に系年されていた（異説なし）が、大石寺六世日持の書写した日持本の発見により、系年は弘安 5 年に確定した。

77) p.1317、定p.1508

78) <295>中務三郎左衛門尉殿御返事及び<318>兵衛志殿御返事を参照。

79) 縮刷遺文p.1591

(わかえ けんぞう・委嘱研究員)

## A Study of When Nichiren Penned His Writings – In Regards to Letters from the Koan Era (1278-1282)

Kenzou Wakae

Nichiren wrote many treatises and letters (*Gosho*), but in numerous cases, he wrote only the month and date without specifying the year. So we are left with many questions of when exactly he penned his works. As a result of studying of his works, I propose to revise the year of when some of the *Gosho* were written, specifically *Matsuno dono gohenji* (*Reply to Matsuno*) and *Nichinyo gozen gohenji* (*An Outline of the "Entrustment" and Other Chapters*). They are commonly believed to have been written in 1278 (1st year of Koan), but in fact, they were both written in 1279 (2nd year of Koan). Through this, we can support the idea that the epidemic prevalent from September 1277 had subsided by spring of 1279.

A Study of When Nichiren Penned His Writings – In Regards to Letters from the Koan Era (1278-1282)